釈尊における教化法の研究　その一

皆　川　広　義

一

釈尊は、成道後まだガヤの菩提樹下にあつた頃、「困苦して我証得せるところを、今また何ぞ説くべけん。貪・瞋に悩まされたる人々はこの法を悟ること易からず。これ世の流れに逆い至微にして、甚深・難見・微細なれば、欲に著し・闇黒に覆われし者は見るを得ず。(1)」と、伝道のためらいを述べている。この説くべきか、否かの釈尊の心の葛藤は、経典に梵天勧請等の物語となつて示されている。

まず、梵天は釈尊の伝道のためらいに対して、「ああ、世間は敗壊せん。ああ、世間は敗壊せん。ここに如来・応供・正等覚者は心に黙然を思い、説法せんとは欲したまはず。(2)」と、釈尊が説法しなかつたら社会は破壊してしまうだろうと社会的な責任を彼に示している。次に、「世尊願わくは法を説きたまえ、有情にして塵垢少なき者あり、若し、法を聞かざれば退堕するも、聞かば法を悟り得べけん。」と、人々のなかにも法を理解する教化の可能なる者がいることを示している。

そこで、釈尊は、「梵天の勧請を知り。また、有情を哀愍するによりて、仏法をもつて世間を観察したまえり。」とあるごとく、ここに到つてはじめて仏法の立場に立つて人々を考察することになる。釈尊は、この観察から雑染の世に生きている人々でも、泥中にあつて染汚されずに美しい葉や花をつける蓮のように、すべての人々に尊いものが内在していることを発見する。このことは、すべての人々に仏法の伝道可能なることを理解したことになる。

そこで釈尊は、「甘露の門は、ひらかれた。耳あるものは聞け。已信を棄てよ。」と、伝道の決意を高らかに述べるのである。

伝道を決意された釈尊は、冥想しながらまず唯に法を説くべきか、伝道対機の選択をすることになる。

このことを経典は、「わたしは先ず最初に誰に対して教え

を説くべきであろうか。誰がこの教えを速かに理解するであろうかと考えた。そこでわたくしは、このように考えた。実にこのアーラーラ・カーラーマは賢者で、識見あり、聡明で、長いあいだ無垢の性の人である。さあ、わたくしは、アーラーラ・カーラーマに最初に教えを説こう。」と述べ、最初に学んだ師であるアーラーラ・カーラーマを選んだとしている。

まもなく、この師がすでにこの世にないことを知ると、次に、同じ参学の師であるウッダカ・ラーマプッタに対して同じような考察をして選んでいる。この二人の対機選択の基準は、速かに理解すること、したがつて、賢者であり、識見があり、聡明であり、無垢の人であることである。

しかし、釈尊はこの師もすでに世にないことを知ると、かつて共に学んでいた五人の沙門を選ぶことになる。この五人の沙門は、釈尊の父浄飯王がかれの身を案じてつけた待者であるとの記録があるが、[3] 苦行を中止した釈尊のもとを五人とも去つているのでこの点はうたがわしい。

釈尊はこの五人の沙門に対して「五比丘は我がために饒益すること多かりき、我・専心精勤せしとき我に承事せり。我よろしく先づ五比丘のために説を説くべし。[4]」と考え、対機として選んでいる。この場合の対機選択の基準は、五人の沙門がかつて自分の苦行中につくしてくれたことと、共に修行した同朋であつたことである。

また、前の二師の場合も五人の沙門の場も共に出家修行の沙門であり、一般の人々は教化の対機としては考えられていない。すべての人々に仏性ありとしながらも、まず速かに理解する者をさがしている点、釈尊の慎重な伝道への心やりがうかがえる。

伝道の対機が決定した釈尊は、「ときに世尊はウルヴェーラに随意の間住したる後、バーラーナシーに向うて遊行したまえり。」と経典にあるごとく、そこにしばらく滞在し、五人の沙門に対する教化の構想をねつていることがわかる。

二

釈尊はベナレスに向う途中、アージーヴィカ教徒のウパカより、問法される。ウパカは釈尊の姿の清澄なるをみて、出家の動機やその師について問う。それに対して釈尊は、「我は一切勝者にして一切智者なり。一切諸法のために染せられるなし。一切を捨離し渇愛尽きて解脱せり。自ら証知したれば誰をか師と称すべき。我に師もなく我に等しきものもなし。人天世間に我に比倫するものあることなし。我は世間の応供なり無上の師なり。我独り正等覚者にして清涼寂静なり。法輪を転ぜんとて迦戸の都域にゆくなり。盲闇の世間に於て甘露の鼓を撃たんとす。」と述べている。ウパカは「汝の

自称するがごとくなば、汝は無辺の勝者たるに適わん。」と述べ、釈尊は、「若し、諸漏の滅尽を得ば我に同じく勝者なり。諸々の悪法に勝てるが故に我は勝者たり。汝ウパカよ。」と呼びかけたが、ウパカは「あるいは然らん。」といい、頭をふりふり別路をとつて去つてしまつた。

釈尊は、このみずから法を問うてきたウパカに対する最初の説化に成功しなかつた。これはウパカの態度もさることながら、釈尊の伝道へのきおいが強すぎて、対機の立場を考えないための失敗と考えられる。しかし、その説示には、この教えを信じ、実践せば悟りと安心とが得られるという仏教の基本が明示されている。

三

釈尊は、ガヤよりベナレスまで約二百マイルを数十日間かかつて徒歩で行き、一ヵ月ぶりに五人の沙門と再会する。はじめ五人の沙門は、釈尊の訪問を彼が苦行を棄て堕落したものと考え、歓迎しなかつた。

釈尊は、五人の沙門のところに行き、坐すると、「比丘たちよ、善く聴け、我すでに不死を証得せり。我救うべし。我法を説くべし。教えるところに随つて行ぜば久しからずして、無上の梵行の究尽を現法に証知現証し、具足して住すべし。」と述べ、これに対して五人の沙門は、「ゴータマよ、汝はかの行、かの道、かの難行をもつてしても、なお、上人法、至尊殊勝の智見を証得せざりき、今はまた、汝は奢侈にして、精勤を棄て、奢侈に堕せり。如何ぞ、上人法、至尊殊勝の知見を証得し得べけんや。」と疑問を述べた。これに対して、釈尊は、「比丘たちよ、如来は奢侈に非ず、精勤を棄てたるに非ず。奢侈に堕せるに非ず。」と釈明している。この問答は三度もくりかえされ、大変熱のある対話となつている。最後に、釈尊は、「比丘たちよ、汝らは今より先に我かくの如く説きしことありと知るや。」とひらきなおつた問をし、五人の沙門はやつと「然らず。」と納得することになる。このひらきなおつた質問法は、すぐれた説得法であり、「時に五比丘は、もとのごとく世尊に傾聴し、善聴し、了知心を発したり。」と経典は述べている。

五人の沙門の教化は、沙門としての生活をささえる行乞があるので、二人と三人のグループに分け、行乞と説示を交互に行った。

説法の内容は、経典によってその伝いるところが多少異なるが、苦行をなぜすてたか理由を説明しながら悟りの内容を示した苦楽の中道説や、四諦八正道、無我説などが説かれたと考えられる。また、対機が出家修行者であるためか、教理上の説示が中心となつている。

説示に対する五人の沙門の反応は、「五比丘は歓喜して世

尊の所説を信受せり。」とあり、まず、全員が所説を信受したことがわかる。

最初に説示の内容を悟るのは、五人の沙門のうちコーンダンニャであり、経典は、「世尊、この教えを説きたまえるとき、尊者コーンダンニャは遠塵離垢の法眼生じたり。集法を有するものは悉くみなこれ滅法を有すと。ときに世尊は、讃じて言いたまえり。コーンダンニャは悟れり。コーンダンニャは悟れり。」と述べている。このコーンダンニャの悟りによつて、釈尊の教えは初めて伝道されたことになり、仏教の三宝である仏・法・僧が成立したことになる。「コーンダンニャは悟れり。」とくりかえし述べられる釈尊の言葉なかに初めて教化をなしとげた伝道者のよろこびがありありとうかがうことができる。

「尊者コーンダンニャはすでに法を見、法を得、法を知り、法に悟入し、疑惑を超え、惑いを除き、無畏を得、師の教えを措きて他によることを無く、世尊にもうして言いり。我願くは、世尊のみ許において出家して受戒したい。世尊いたまえり。来れ、比丘よ、法は善く説かれたり、正しく苦を滅尽せんがために梵行を行ぜよ。これかれ尊者の受戒なりき。」と経典にあるごとく、コーンダンニャは引きつづいて釈尊により受戒をしている。

次に、ヴァッパとバッディヤの二人が同時に悟りを得、最後に、マハーナマンとアッサジとが同時に悟りを得ている。ある仏伝には最後の二人が悟りを得たのは成道後第一年の四月十四日であると記している。[5]

このように五人の沙門の教化は、最初に釈尊の求道に対する誤解を説くことからはじまり、次に教理上の高度の説示がなされ、一人、二人、二人と次々に教化をなしとげている。五人の沙門が同行でありながら悟りが別々であつたこと、また、二人が同時に悟りが得られたということ、及び、その教化に長い時間がかつていることなどは他の教化と比較して注目すべきことである。

四

釈尊は、五人の沙門を教化した後、まもなくベナレスの長者の子ヤサを教化することになる。

ヤサは、冬・夏・雨季の三つの御殿があり、多くの侍女にかしずかれた生活をしているなど出家以前の釈尊の境遇に似た豊かな生活をしている。しかし、彼は釈尊が感じたと同じようにそのような生活の中にもしのびよる無常を感じ、ある朝、家を出て、多くの沙門の住んでいるサールナート向う。

そこで、ヤサは朝の経行中の釈尊に逢うことになる。このかんのことを経典では、[6]「ときに、長者の子ヤサは世尊の近くに至りて嘆じて言えり。ああ厄なるかな、ああ禍なるか

な。ときに世尊は長者の子ヤサに告げて言えたまえり。ヤサよ、ここは厄無く、このところに禍無し。ヤサよ、来つて坐せよ。我汝のために法を説かん。ときに、長者の子ヤサはこのところに厄なく、このところに禍なしと聞きて、歓喜踊躍して黄金の履を脱ぎ、世尊の存すところに詣れり。」と述べている。そこで、釈尊はヤサに説示することになる。経典には、「長者の子ヤサ、一面に坐せるとき世尊はために次第して説きたまえり。言わく施論、戒論、生天論、諸欲の過患、邪害、雑染、出離の功徳を説きたまえるなり。長者の子ヤサに堪任、柔軟心、離障心、歓喜心、明浄心の生じたるを知りたまいて世尊は諸仏の本真の説法を説きたまえり。いわく、苦、集、滅、道なり。」と述べている。このヤサの説化で注目すべきことは、ヤサが在家であるために五人の沙門の場合と異なつて、まず、一般的な人生問題について述べ、その上に出離の功徳をたたえ、次に本来の四諦の説法をするというように二段階に分けて説示している。

このような周到な説法によつて、「清浄にして黒点なき布の正しく色を受けるが如く、このごとく、長者の子ヤサはたちまちその座において遠塵離垢の法眼を生じたり。」とあるごとく、ヤサ即座に悟りを得る。

五

ところがヤサの家出を知つた彼の家では大さわぎとなり、さつそく彼の父はあちこちさがし求め、サールナートの釈尊のところに到る。

「ときに、長者居士は世尊の在す処に詣れり、詣りて世尊にもらして言えり。世尊は長者の子ヤサを見たまいしや。さらば居士よ。ここに坐せ。汝ここに坐せば、あるいは長者の子ヤサのここに坐せるを見ることあらん。ときに、長者居士は、われここに坐さば長者の子ヤサのここに坐せるを見ることあらんと歓喜踊躍し世尊に敬礼して一面に坐せり。長者居士一面に坐せるとき、世尊はために次第して説きたまえり。」そこで、釈尊はヤサに説示したのと同じように説き、ヤサと同じように悟りを得さしめ、彼を在家の信者としてしまう。

ところが、このヤサの父に対する説法をかげで聴聞させられたヤサは、その説法によつて、観るに随い知るに随つて自己の境地を観察し、その心は取るところなくして諸漏より解脱し、先の悟りより深い境地に到る。このヤサの心境をみて釈尊は、もうヤサは還俗する心配はなくなつたと考えて、ヤサを彼の父の前につれて行く。ヤサの父は、「汝ヤサよ。汝の母は悲憂に満てり。母をして死なしむることなかれ。」と、ヤサの出家を思いとどまらせようとする。ときに釈尊は、ヤサの父に語りかける。「ヤサは、その心は取なくして諸漏より解脱せり。居士よ、ヤサは還俗して前に在家たりしときの

如く諸欲を享受することを得べきや。」と、ヤサの父は思わず「然らず。」と述べ、ヤサに還俗させることを断念し、釈尊にヤサを随従沙門として指導してくれることを請う。釈尊はこのヤサの父の願いを受け、ヤサを随従沙門とする。

このヤサの父に対する教化は、ヤサの父を息子に逢せるという条件で聞法させ、法を悟らせ、その悟りの境地からヤサの出家をみとめさせるといううまい方法を用いている。またヤサの父への説示をかげでヤサにも聴聞させ、両者を一度に教化するというみごとな教化もしている。

翌朝、釈尊はヤサを随従沙門としてしたがわせ、長者の家に行き、ヤサの母と妻を同じように教化し、最初の在家の女性信者としている。このことはヤサの修行のさまたげとなる母や妻への思を切り、また、ヤサの母と妻の彼れへの思いをも切つて両者に安心をあたえている。このように釈尊のヤサとその一族への教化は、完璧でみごとな教化であつた。

1 南伝大蔵経第三巻律蔵三・八。
2 南伝大蔵経第三巻律蔵三・九。
3 大正大蔵経第二巻阿含部下・五四九。
4 南伝大蔵経第三巻律蔵三・一四。
5 西蔵仏伝（The Lite of Buddha-Rockhill)。
6 南伝大蔵経第三巻律蔵三・二七。